

信者の居場所(霊的現住所) (マルコ 16:1-8)

自分がどう思っているかわかりませんが、信者の私たちは死んでいるたましいを生かすために召されている尊い王である祭司と言われるものであります。なのに実際は信者が無気力で、現実につまずき倒れることがたくさんあります。なぜそのような尊いクリスチャンなのに、実際はそうではないのでしょうか。それは救われたのに、その救いの祝福を味わうことができないので、実際的には信者の霊的状态が未信者とあまり変わっていないからなのです。つまり、信者になっている以上、その人の霊的状态さえ整えられれば、その人はたましいを生かす王である祭司として神様に用いられることになるというお話です。イエス様の復活、それは信者の霊的状态を整えて、古い人から抜け出して、新しいミッションの人生をスタートするための鍵となり、力となるものであることを覚えていただきましょう。

今日の聖書には、そのイエス様がよみがえられた、復活なさったことが紹介されています。イエス様がお墓に葬られたあと、それを見ていた女たちがイエス様の遺体に油を塗ろうとしていました。それでお墓の方に一緒に行って、大きな石で入口がふさがれているので、その石を誰か転がしてくれるかなと心配していました。しかし、実際に行ってみると、石がもうすでに転がしてあったのでびっくりしてお墓の中に入ってみると、イエス様は見えないし、白い衣を着ている青年が座っていました。それは天使でしょう。その青年が「あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを探しているでしょう。しかし、その方はこのお墓にはおられません。よみがえられました」と彼女たちに告げて、「このことを弟子たちにお知らせしなさい。このお墓にはあなたがたが求めていらっしゃるイエス様はもはやここにはいらっしゃらない。ここはあなたがたが来られる場所ではない」ということを言っていました。そこでイエス様の復活を通して、私たちの信者の霊的状态を整えていくために、私たちが必ず確認して、固く握って、そして確信をもって感謝しなければいけないメッセージがあります。

1. お墓(死)はもはや信者の居場所ではない。

それが何かといえますと第一に、お墓、つまり死の世界はもはや信者の居場所ではありません。

彼女たちはイエス様がお墓の中にいらっしゃると思っていたので、イエス様がいらっしゃる場所に私たちもいるわけなのでそこを訪ねて行きましたが、御使いが言いました。「もはやここにいらっしゃらないし、だからこそあなたがたもここに居る理由はない。ここは信者のあなたがたの居場所ではないよ。イエスを信じるクリスチャンの居場所ではありません」と言いました。そのことを皆さんが自分自身にしっかりと聞きかせて、それを毎日さまざまな死の世界の脅かし、死の世界の誘惑に対してこの信仰告白によって勝利する信者になりましょう。この死の世界というのはどのようなものなのでしょうか。神様が人を造られたときに死というものはありませんでした。

1) 死の世界

①創世記 2:17>3:1-5

しかし、創世記 2:17 を見ますと、善悪を知る木の実を食べることはダメなんだ。もしそれを食べると必ず死ぬと言われました。そこに死のいちばんのスタートというものがあつたわけです。だから、その善悪を知る木の実を食べなければ死ぬことなどはありません。残念ながら、悪魔サタンに惑わされて、創世記 3:1-5 を見ますと、アダムとエバがその木の実を取って食べました。神様のみことばを逆らい、契約を破って神様に背き、悪魔の誘いに乗ってしまいました。だからそれを食べると死ぬと言われたとおりに、そのときから死んでしまいます。前にもお話したように、人間には他の動物とは違って二つの命が与えられています。霊のいのちと肉の命があります。霊のいのちが死ぬことで、肉の命も死んでしまうこととなります。神様との契約を破って悪魔の誘いに乗って罪を犯した結果、死んでしまいます。そのときから死の世界を生きることとなります。自分でその意識があるかどうか関係なく、神様がおっしゃったとおりになりました。

②ローマ 6:23、ローマ 8:2、ヨハネ 8:44、エペソ 2:3

それでローマ 6:23 には「罪から来る報酬は死です」と言われています。罪を犯した以上、死から逃れることはできません。その死の世界は何かと言いますと、ただ息を引き取って死ぬという単純な話ではありません。たましいが死んでしまうことなのです。エペソ 2:1 には「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」、今ちゃんと息をして呼吸をしてご飯を食べている人間に向かって死んでいると宣言しているわけです。神様を離れることによって霊的に死んでしまうことになり、死の世界に捕らえられることになりました。ローマ 8:2 には、その結果、自分ではどうにもならない、抜け出すことができない死と罪の原理に束縛されることになります。罪から来る報酬による死によって、死と罪の原理に囚われたということがどういう意味なのかと言いますと、分かりやすく申し上げますと、ヨハネ 8:44 「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出たものである」。目に見えない悪魔に属して、悪魔の子という身分を抱えて悪魔の奴隷として生きることになりました。これが死の世界です。そこに良いことなど存在しません。そこに希望も喜びも幸せなども一切存在しないところなのです。これが死の世界です。すべての人が罪を犯したので、すべての人がその人の外見や肌色や階級、能力、才能、人格、その人の教養、品性などと全く関係なく、すべての人が死んでしまい、この死の世界に陥ってしまったということをお覚悟しましょう。だから死の世界では、エペソ 2:3 にあるように、生まれながら神の御怒りを受けるべき子らとして生まれます。生まれるときから。それが死の世界です。

③自分の奴隷、お金の奴隷、この世の奴隷

その死の世界を生きる人の特徴は何かと言いますと、神様を知らないで、自分の奴隷として生きて行くことになります。自分は自分の人生に責任を持つことができる、そういう能力ある存在ではありません。罪人の自分の奴隷として、自分のわがままで生きることになります。そして、目に見えないお金の奴隷として人生を生きていきます。なぜ戦争が起きているのでしょうか。結局、根底の方にあるのはお金なのです。なぜ日本の場合、国を守るために空母を備えないといけないのでしょうか。その空母備えるためにはアメリカから一機 150 億円ぐらいする戦闘機を何百機も買わないといけません。全部お金なのです。お金の奴隷なのです。お金のためなら戦争を起しても人を殺しても構わないのです。刑務所に入る人は、目立って法律違反になって入るだけであって、違う方法で人を殺しても刑務所に入らないままの人も方法もたくさんあります。目的は同じお金なのに、ある人は英雄呼ばわりになり、ある人は犯罪者になって刑務所に入ります。これが死の世界なのです。そして、永遠の世界、霊の世界などには全く無知なので、今目に見えるこの世がすべてなのです。だから、この世にあるものの奴隷として生きるしかありません。それが死の世界の真相です。

④偶像、宗教、占い

自分の奴隷なので、お金の奴隷なので、この世の奴隷なので、そこでどうすれば上手くいくんだろうかということで、偶像を作って拝むようになるしかないし、宗教を求めざるを得ないし、占いに頼るしかありません。それが死の世界の姿です。そこで生きることになりました。

⑤滅びの運命、疲れと重荷、勘違いと自己催眠

なので当然、先ほども申し上げましたように、幸せ、平和、安息などはそこに存在しません。精神的に病んで肉体的に病んで、人生そのものが病むしかない滅びの運命に囚われて生きていくようになるし、いつも不安と思えば煩いと悩みともがきともがきとさまよいの人生を歩き、最終的には疲れて重荷を背負うしかないのです。なぜなのでしょう。いま居場所そのものが死の世界なので、そこで一時的に表にそういう問題が現れないときには勘違いするのです。私は平坦だ。平凡だ。幸せなんだと勘違いして高慢にもなったり、場合によっては大丈夫、大丈夫、大丈夫と自己催眠をかけたりするしかありません。マスメディアもアニメーションも漫画も小説も映画も音楽も全部自己催眠なのです。失恋したのか。大丈夫ですよ。失敗したのか。大丈夫です。大丈夫ですよ。また起き上がればいいよ。全部そういう話なのです。本当に起き上がればいいのでしょうか。本当に大丈夫なのでしょうか。何を根拠にして大丈夫とい騙しているのでしょうか。それが死の世界なのです。そこから逃れることはできません。だから、世の中では運命という言葉を使っているのです。これがお墓の中なのです。イエス様が私たちの罪を背負って、死の運命に囚われている私たちのすべての負い目を背負ってお墓の中に葬られ、それを経験されました。そして、その死の力を打ち破ってよみがえ

られ復活なさいました。もはやお墓の中にいらっしやいません。

2) 死の世界はもはや信者の居場所ではない

①ヨハネ 5:24 ②ローマ 8:2 ③Ⅱコリント 5:17

なので、そのよみがえられましたイエス様を救い主キリストと信じれる信者の私たちは、この死の世界はもはや信者の居場所ではありません。イエス様がいらっしやるところが私たちの居場所なのです。お墓の中でこの死の世界で自分のありかを求めたり、探そうとしてはいけません。どんなことがあっても。ヨハネ 5:24には「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」。キリスト・イエスのうちにあるものは、いのちと御霊の原理によって死と罪の原理から解放され、誰でもキリスト・イエスのうちにあるものは、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなります。皆さんの条件、現実、環境、状況などによって惑わされることがないように、しっかりと契約を握ってイエス・キリストを中心にして信仰に立っていただきましょう。もはやお墓は私たちの居場所ではありません。今まで申し上げました死の世界、それはもはや私とはもう縁が切れてしまいました。私のものではありません。私がこだわるべき世界でもありません。気にかけるような世界ではありません。

3) 信仰告白により暗闇は砕かれる

お墓は、死の世界は、悪魔が支配しているその運命の世界は、もはや私の居場所ではありませんと心から告白するときに、目に見えない暗闇の勢力が砕かれていくようになります。なぜそれを迷っているのでしょうか。なぜそれを躊躇しているのでしょうか。なぜ死の世界をそんなにも懐かしく覚えているのでしょうか。例え病気が私を襲ってきても、この世界が私を攻撃したとしても、私たちはもはやこの死の世界とは縁が切れているものです。もう終わったんだよ。私の世界ではない。そこに気にかける理由はないと、まずは大胆にキリスト・イエス、復活のイエスの御名によって宣言しなければなりません。これが皆さん、自分自身を維持して行くための方法なのです。義人は信仰によって生きるのです。クリスチャンになったので何もかもがうまく行って、平坦で…そういうことを想像すると必ず失敗します。死の影の谷を歩くときもあります。迫害されるときもあるし、自分の弱さのゆえに倒れるときもあります。しかし、それは死の世界での話ではありません。形を見ると同じく見えるかもしれませんが、全く次元が違うのです。なぜでしょうか。私の救い主イエス様が復活なさってお墓の中にいらっしやらないのです。死の世界を打ち砕いて勝利されました。イエス様が私の根拠です。私の存在意義、幸せ、私の力もすべての根拠はイエス様ご自身です。それを信仰と言います。ならば私たちの居場所はどこなのでしょうか。白い衣を着ていた青年はここじゃないから早く出て行きなさいと。イエス様がガリラヤの方に行かれるとおっしゃったのでそこに行きなさいよと。今私たちはガリラヤに行くべきでしょうか。よみがえられた、復活されたイエス様は今どこにいらっしやるのでしょうか。イエス様がいらっしやるところが私たちの居場所なのです。

2. 信者の居場所(霊的現住所)は御座である。

今、お墓の中からよみがえられたイエス様は、天に昇られて御座に座っていらっしやいます。万軍の主として。なので信者の居場所、別の言葉で霊的現住所は御座です。これを覚えていてください。

1) ヘブル 10:12-13、エペソ 2:6

ヘブル 10:12-13 を見ますとこういうふう書いてあります。「しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、それから、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです」。今、神の右の座についていらっしやいます。エペソ 2:6には「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました」。キリスト・イエス様がいらっしやるところに私もいます。私がいるところに復活のキリストも一緒にいらっしやいます。これが信者のアイデンティティです。これが信者です。教会に通うことだけが信者ではありません。信者になるというのは、イエス様を信じるということは、存在そのものがガラリと変わる事なのです。今まで死の世界、お墓の中に葬られていたそのものが、地獄の運命を抱えて死んだあと地獄に行くしかない死の世界を生きていたものが、いのちの世界に、キリスト・イエスの内側に移されることになりました。それがイエス様を救い主として信じるということなのです。なんと素晴らしい祝福でしょうか。もちろん口に当たることとか、銀行の残高が

増えることとか、大学に合格することとか、昇進することとか、それが幸せだと固く思っている限りは今の話が何の意味があるのかと思うでしょうけれども、すべては消えてなくなるものです。永遠に変わらない、目に見えるすべてに打ち勝って勝利できる御座の祝福が私たちのものです。皆さんの現住所、居場所はどこなのでしょうか。皆さんは今どこに住んでいらっしゃるのでしょうか。浦和なのでしょうか。川越なのでしょうか。

2) RT7 人

レムナント 7 人すべてをここで確認することは難しいですが、例えばヨセフは家庭内暴力にあっていました。それは決して良いことではありません。しかし、だからといってそれが起きないわけでもありません。勝てない暴力と兄弟いじめにあって、大変な目にあっていました。その時にヨセフはそのいじめ、家庭環境が居場所ではありませんでした。そこにちゃんといます。肉体的にいるのにも関わらず、その人のたましいはヨセフの心は、よみがえったキリストとともに御座にその人の住所を持っていました。分かりますか。だから祈るのです。そうすると御座の神様が見せてくださるものを見るようになります。ぜひ聖霊様が皆さんに悟りを与えられ、霊の目が開かれて「なるほど」になることを祈りたいと思います。ヨセフはその後、ポティファルの家で認められて、神の霊にこのように感動しているものは見たことがないとすべてを任せました。にも関わらず、また濡れ衣を着せられます。それで刑務所に入れられることとなります。刑務所、濡れ衣を着せられるような状況でしたが、その状況にヨセフはいませんでした。しっかりとそこを通っていたにもかかわらず、ヨセフのたましいと心は御座にあったわけです。自分の居場所、自分の現住所は、刑務所でもいじめられるところでも濡れ衣を着せられるところでもありません。ダビデは何も悪いことをしていないのに悪霊に取りつかれたサウル王がダビデを殺そうとしていたので、青春真っ只中の時期を逃亡者として過ごしました。あまりにもつらかったので死の影の谷を歩くという表現をしました。確かに死の影の谷を歩いていました。にも関わらず、ダビデの心とダビデのたましいの居場所は御座だったのです。主は私の羊飼い。私には乏しいことはありません。これがクリスチャンの居場所です。これを 24 の祈りと言います。24 時間目をつぶって祈るという意味ではありません。私たちが現実、地上でどのような場面、どのような状況に置かれるかすべて分かりません。自分で全部決められるわけでもありません。しかし、どこに行ってもいつでもどんな状況でも。人間的にそれが嬉しいのかつらいのか、いろいろあるでしょうが、変わることなく私の居場所は御座なのです。私の居場所はイエス・キリストなのです。復活なさったイエス・キリストが私の居場所なのです。危機にあっているときにもレムナント 7 人は同じでした。ダニエルは死刑になると分かっていました。でも、死刑になる状況の中にダニエルはいません。いつものようにエルサレムに向かって窓を開けて、キリストがダニエルの居場所だったわけです。御座がダニエルの居場所でした。パウロはたぶん伝道者の中で一番刑務所の出入りが激しかった一人だったと思います。伝道のために。別に自分の私欲のために何かがあって刑務所に入ったわけではありません。福音宣教のために。しかし、パウロは一度も「私は刑務所にいるので…」と思ったことはありません。刑務所の中でも「ジーザス・クライスト」。パウロがいちばんよく使っていた言葉です。刑務所の中で天にある霊的すべての祝福をいただいているんだ。いつも自分の居場所は、刑務所の中に収監されているにもかかわらず私は御座にいるよと。私の居場所は御座なんだと。だから、刑務所がなんてことでもないし、何も問題になりません。いつ出られるかどうか、何も気にしません。御座を味わいます。一番特徴的な代表的な内容が、シラスという人と一緒に刑務所に入れた時に、いつ出られるかも、死ぬかもわかりません。でも賛美を捧げていました。怖いから賛美しよう。少し紛らわすために賛美しようとか、そういう賛美ではありません。刑務所の中で賛美をしました。

3) マタイ 6:33、ピリピ 4:6、I テサロニケ 5:16-18、使徒 1:7-8、マタイ 5:14、I ペテロ 2:9、エペソ 1:23 なぜでしょうか。今、刑務所ではなくて御座にいるわけですから。そして、刑務所が揺れる地震が起きて、そこで「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われるよ」という有名な福音宣教の場面が許されることとなります。それがすべてなのです。刑務所にいようが、御座が私の居場所なので、それを味わったときに福音宣教の門が開かれれば、それで人生終わりなのです。右に転ぶか左に転ぶかは関係ありません。これが信者の居場所です。信者の居場所が神の御座、キリスト・イエスなので、私たち信者に言われるさまざまメッセージが理解できるようになります。みな何を食べるか、何を飲むか、何を着るかを気にかけて心配するのが当たり前になっています。それに対してそれはあなたがたの祈りではない。そういうことを求めないで神の国と義を求めなさいと言われるゆえんがここにあるわけです。その根拠があなた

がたは居場所が御座である神の民だろう。でもこれがわかっていないと、昨日も申し上げましたように、飢饉が起きてどうしよう。それが普通ではないでしょうか。何を食べるか飲むか心配するのが普通でしょう。だからそれをしないでというのがなかなか理解できません。だからクリスチャンでありながらも祈りがなかなかできない。正しい祈りが。2部礼拝で祈りのお話をしますけれども。ピリピ4:6にあるように、「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」。どうして何も思い煩わないことができるのでしょうか。納得できますか。私はクリスチャンになった最初は納得できませんでした。「思い煩わないで」であればある程度うん、うんとなるけれども、「何も」がそこについているのです。何も思い煩わないでと。信者でも内側から納得できません。私たちの居場所、つまり自分は霊的な世界に鈍感だったわけです。自分の居場所が、思い煩うようなその地上ではなくて、御座が間違いなければ何も思い煩わないでというのが「なるほど」になるわけです。それから私が到底、理解できなかつた箇所の一つが「いつも喜びなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい」。今まで人生生きてきて、もちろん救われて感謝で溢れてはいたのですが、どう考えてもいつも喜ぶというのはいりません。祈りは絶えずではなくて、しばらくもできていなかったのをそれをパスして、すべてのことを感謝しなさい。私をだました人間がいるのに、どうして感謝しますか。すべてのことを感謝しなさい。聖書は喜びなさい、感謝しなさいとだけあればある程度は。でも必ず「いつも」「すべてに」というのがくつつくのです。それでこれはありえない。もちろん、信仰がこれから成長していけばこのようになれるのかとかいろいろ考えていました。自分の居場所が御座であれば、これがあろうことなのです。もちろん自分の力ではありませんが。これが全部無理矢理ぶつける話ではなくて、私たちがいかなる祝福の存在なのかという裏返しなのです。弟子たちが自分の国の植民地の状況を気にかけて「どうなりますか」と尋ねるのは普通でしょう。それに対してイエス様が最後に「あなたがたはそれは知らなくてもいいよ」と。なんと冷たい話でしょう。知らなくてもいいよ。あのうちの子どもがですね。うちの旦那がですね。仕事場でですね…とかいろいろ言いたいでしょう。しかし、それはあなたがたは知らなくてもいいですよ。私たちはそれに対してA、Bという答えを求めているのに。柳先生のメッセージを聞く時もそういうのがないですか。自分では自分なりに1、2を求めているのに漠然とした答えしか出てこないような。それは答えが漠然ではなくて、私たちが御座について曖昧だからです。それでイエス様は知らなくてもいいよと。理由は、あなたがたはこの地上を生きてもよその人とはもう違うのだよ。御座があなたがたのものではないのか。40日間、御座についてお話しただろう。Only 聖霊が臨まれると。私たちの目的は右に転ぶか左に転ぶかではなくて証人となることです。それは誰も止めることができません。こういうこと言われるゆえんがここにあるわけです。私たちの居場所は復活のイエス様と一緒にいるのです。だからイエス様が天に昇られた時に私たちも一緒にそこに座らせてくださいました、と過去形になっているのです。これが霊の世界です。今ここに居るでしょう。でも皆さんは御座と一緒に居るのです。イエス様が御座にいらっしゃるでしょう。でも、皆さんと一緒にいらっしゃるのです。私たちの居場所は神の御座ということ覚えてください。

だから、こういうふうと言われることも理解できるのです。あなたがたは世の光ですよ。何が私が光なのかとついつい思うでしょう。お金もあまりないし、成績もそんなに自慢できるようなものでもないし。家庭環境もほかの人と比べると…となるとヨセフはどうでしょう。ダビデはどうでしょう。皆さんが思っているような優しい、より良い環境などはありませんでした。でも皆さんのようにつぶやかないで少年の時に世界を変える伝道者として用いられました。年などは関係ありません。正しい意味での夢を持ってください。私は総理大臣、国会議員の前で、王の前でイエス様のおあかしをするものになるんだ。ただの大きさではなくて夢を持ってください。事実ですから。なぜなら御座が私たちの居場所に間違いなければ、そしてその御座の祝福が具体的に現れるとすれば、誰が私たちの上に立つことができるのでしょうか。それを霊的サミットと言います。言い訳がいません。言い訳、つぶやき、不信仰、不平不満というのは、荒野をぐるぐる回っている状態であって、この居場所を勘違いしてずっとお墓の中にいるのです。もはや私たちの居場所ではありません。それであなたがたは王である祭司、イエス様と同じ役職が付くわけです。王である祭司。理解できますか。自分が王である祭司なのです。皆さんの内側にはいのちがあり、王であるイエス様が皆さんの内側にいらっしゃるのです。だから王として堂々としてください。王は何にもひっかからない立場です。それをサミットと言います。霊的サミット。エペソ1:23には、あなたがたはキリストのからだなる教会と。神秘的ではないでしょうか。皆さんがキリストのからだなのです。キリストがかしらであってくつついている

のです。キリストのすべてが皆さん通して現れるのです。流れるのです。それが信じられるでしょうか。ちゃんと頷いて受け付けられるでしょうか。なぜそうならないのでしょうか。自分、肉、この世が基準になっている体質から抜け出してないからです。キリストが基準です。信仰が基準です。私の居場所がキリストであれば。キリストがどこにいらっしゃるのでしょうか。神の御座に座っていらっしゃると思います。神の御座が私の居場所です。現実的に肉体的に地上でどこにしようが、私の居場所は変わることなく御座です。そこを忘れないでいると、暗闇が砕かれるだけではなくて、いのちの運動につながるようになります。必ず。それが目的ですから。

まとめましょうか。なので皆さんがこれからこの契約を握って、復活のイエスの御名で死の勢力、お墓の勢力を退けて、そこから抜け出すようにしましょう。先ほど死の世界が何なのか申し上げました。それが皆さんに襲いかかったときに、あるいはそれに皆さんを引きずり込もうとする何かがあるときに、計算も何もせず大胆に「そこは私の居場所ではない」と告白しましょう。不安になったり、誰かを妬んだり、心配で落ち込んだり、偶像的な占いの頼りをしようとしたり、さまざまなことがあります。今までの習慣通りに、世の中の風習通りに、その時ごとに「違う。そこは私の居場所ではない。私の住む世界ではない。私は住む世界が違うんだよ。イエス・キリスト、復活の御名によって死の力は出ていけ」と大胆に告白して宣言してください。戦ってください。それでもまた負けるときもあります。それでも構いません。ずっとずっと宣言してください。戦ってください。そのうちそれがやりやすくなります。

主の祈りをイエス様が教えられました。その主の祈りのメインの内容は、神の国と義を求めることなのですが、その間に悪からお救いくださいという祈りがあります。そこは私たちの世界ではないから、もし何かがあつてそこにはまったときには早く出て来なさいよ。そういう意味なのです。なぜなら神の国と義を求めて、その世界に生きる者なので。自分の良心がどうのこうの、社会の道徳がどうのこうの、それを無視するという意味ではありませんが、そういうことが基準になって長く溺れているということは良心的な人ではなく不信仰です。霊的事実が分かっていない、イエス様の復活を信じていない人、自分の居場所を勘違いしてる人の行動です。わかりますか。なかなか分かってもらえないような顔をしていらっしゃるのですが。とにかく宣言して、死の世界に皆さんを渡さないようにしましょう。

それから、自分の現住所、自分の居場所がどこなのかを黙想するようにしましょう。周りから見ると、何あれ、図々しいなあと思われるときもあるかもしれません。構いません。それで自分の居場所を黙想したときには御座を確認して、それから祈るわけです。悪に溺れていた。そのことにあまりにもこだわらないで早く出てきて、だからこそ、さらに御座の祝福が私の中に現れるように。その御座の祝福が現場に現れるように。御座の祝福が5000種族に現れるように。そのために御座の祝福が私の勉強に、私の業に、才能に現れる。そ。そうすると私たちの弱さも治ります。弱さも問題になりません。パウロのように逆に弱さを誇りに思って感謝することになります。このように私たちは住む世界が変わりました。世の中で住む世界が違うよと言われるそれとは違います。でも今日ぜひ覚えていただきたいのは、私たち信者は住む世界が変わりました。死の世界から御座の世界に変わっています。そこが私の居場所です。騙されないで、この祝福を存分に味わい、暗闇の力が砕かれて、いのちの運動につながる神の答えの主人公になりましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。なんと素晴らしい神様の祝福でしょうか。神の恵みによりただイエス・キリストを信じて受けいれただけなのに、死からいのちに移って、もはや死の世界、お墓は私たちの住む場所ではなく、神の御座が、復活のイエス様のいらっしゃるところが私たちの居場所であることを心から感謝申し上げます。どうか悪魔のだましごとに、目に見えることに惑わされることなく、ヨセフのようにダビデのようにいつもどこでも自分の居場所を神の御座と確認して、御座の祝福を具体的に信じて味わう祈りの信者としてひとりひとりを整えてください。感謝してイエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン。